

錢鍾書『圉城』解説 1

—「近代」中国のさまよえる知識人達

杉 村 安幾子

1. 序 — 「圉まれた城」の含意

錢鍾書¹の代表的小説である『圉城』²について、その主たるテーマは錢鍾書の妻楊絳が語った「城に圉まれている人は逃げ出したい。城の外の人の中には飛び込んで行きたい。結婚にしても、職業にしても、人生の願望は大抵このようなもの」³であるとされる。タイトル「圉城」の示唆する含意である。これは元々、『圉城』中において交わされた次の会話に基づいている。主人公の青年方鴻漸が出席した知人達との食事会の場面である。

慎明は言った。「Bertie の結婚と離婚について、僕は彼と話したことがある。彼はイギリスの古い言葉を引いてこう言っていた。結婚は金の鳥籠のよう、籠の外の人の中は暮らしたいし、籠の中の人は飛んで出たい、だから結婚しては離婚し、離婚しては結婚、終わりなんかないのさ」

蘇小姐も次のように言った。「フランスにもそういう言葉があります。もっとも鳥籠とは言わなかったけど、包囲された城砦 *fortresse assiégée* と言ったわ。城の外の人には攻め入りたいし、城の中の人には逃げ出したいってね。鴻漸、そうよね？」（三章）⁴

方鴻漸はここではこの会話を何気なく聞き流すが、「籠の外の人の中は暮らしたいし、籠の中の人は飛んで出たい」、「城の外の人には攻め入りたいし、城の中の人には逃げ出したい」という境地は、『圉城』全般に響く通奏低音となる。物語において、方鴻漸は船上に始まり、上海、故郷、内地、再び上海という具合に次々と生活の場を変えながら、恋愛・就職・結婚全てにおいて失敗・挫折

するのである。

会話中に見られる「結婚は金の鳥籠のよう」云々は、イギリスの古い言葉ではなく、実際はモンテーニュ『エッセー』中の以下の一段に拠るものであろう。

結婚をよく規整し、よく把握するならば、われわれの社会にこれほど美しい結びつきはない。われわれは、これがなくては過ごせないのに、その値打を下げてばかりいる。ちょうど鳥籠の場合と同じことで、外にいる小鳥は中に入ることに絶望し、内にいる小鳥は外に出ようと同じようにばたばたする。⁵

錢鍾書とモンテーニュのこの一文に関しては、錢鍾書の西南聯合大学時代の学生である趙瑞蕓の回想がある。

私は錢先生がボッカチオ『デカメロン』、セルバンテス『ドン・キホーテ』、モンテーニュ『エッセー』について紹介評論なさった時、非常に素材を熟知なさっておいでで、そうした作家とその傑作を生み出した時代及び社会背景について深く掘り下げ、生き生きとした分析をなさり、かつ非常に面白く講義されたのを覚えている。(中略)彼はモンテーニュの『エッセー』をたくさん読むように、読んで詳細に検討するようにと言っていた。私は、彼がモンテーニュ『エッセー』第三卷第五章における結婚と鳥籠の関係についての一段を挙げ、モンテーニュのユーモアと機智および人の世の不幸に対する観察を説明なさったのを思い出す。後になって、錢先生は1947年に『圉城』を書かれた際に、蘇小姐の話を挙げられた。(中略)私は今でもなお錢先生のこの会話での意味はわからないが、ここでの言い方は、モンテーニュの啓発を受けたものだろう。⁶

講義時に、モンテーニュ『エッセー』中の結婚と鳥籠に関する一段を特に取り上げて解説している所から、錢鍾書がこの一段を重視し、気に入っていたことが看取されよう。

方鴻漸は、後にこの「圉城」の含意をしみじみと思い出す。

「僕はあの時、褚慎明だったか蘇さんだったかが言った“圉城”とやらの話を覚えている。僕は最近人生万事に対し、全てにそう思えるんだ。例えば、僕は最初三閩大学へ行くことを希望していた。だから招聘状を受け取

った。でもこのところ、考えれば考えるほど味気なくなって、今この船で上海に戻る勇気が自分にないことを恨んでいる。（中略）犬が水に映った肉の骨の影を追ったために、銜えていた骨の方までなくしちゃった！望んでいた恋人と結婚できたとしても、きっとこの時、肉の骨を食べつくしてしまったようなもの。逆に水際で二度と見えない影が惜しくなるのさ。」（五章）

方鴻漸は恋愛に失敗し、鬱屈した生活を送っていた。そうした生活から脱け出るために、内地の大学からの招聘を受け、友人とともに任地に赴くが、彼はこの段階で既に「囲城」の含意が人生全般に関わってくることを悟っているのである。ゆえに、『囲城』のプロットについては、「男女間の愛の神による包囲とそこからの脱身」⁷というように、恋愛・結婚が焦点となる解釈が多いが、「作者は更に“囲城”という語で世の中のありよう、人生万事を象徴している。したがって、小説は恋愛という上着を着ているだけであって、より深遠な意味を包み込んでいるのである」⁸という見解がより妥当であろう。

本稿では、『囲城』の作品中におけるこの「囲城」のモチーフを追っていく。尤も、主人公方鴻漸自身の恋愛・就職・結婚に関する希望と挫折の軌跡は、既に論があるために本稿では扱わないこととする。着目すべきは他の要素である。『囲城』が方鴻漸を主人公として、「人生の願望は大抵このようなもの」という境地を描いていながら、実は別の大きな問題意識をも孕んでいることを指摘したい。

2. 旧式知識人の困惑

『囲城』は「新儒林外史」⁹と称される。清代の文学者呉敬梓の『儒林外史』は、同時代の読書人の腐敗墮落を諷刺することで、科举制度の矛盾を痛烈に批判した小説であるが、これに「新」の語を冠としたのは、『囲城』が新旧さまざまな知識人を描いたことに拠る。主人公方鴻漸はヨーロッパ留学帰りの新式知識人であり、その父親は清朝の挙人という立場が示すように旧式の知識人である。『囲城』はこのように新旧の知識人がともに登場し、中国が近代化¹⁰を

促進しつつあった、新旧の価値観が交々相乱れていた時代を背景としている。
具体的には小説の冒頭部を見てみよう。

中国では例年に比べて暑さがより厳しく、事件の後には皆が兵戈の前触れであったと言った。と言うのは、時まさしく民国二十六年（一九三七年）であったからだ。

1937年7月7日、盧溝橋事件が勃発、それに端を発し八年に及ぶ日中戦争の火蓋が切られたのであった。

以下、『囲城』の作品世界に至るまでの時代背景と知識人を取り巻く環境をごく簡単に俯瞰しておこう。中国は十九世紀後半、当時の清朝政府が近代化政策として洋務運動を開始する。これは西欧の言語や科学技術の摂取に主眼を置いていた。1884・85年の清仏戦争と1895年の日清戦争における相次ぐ敗北は、旧式の教育体制、延いては世界観への強い反省を喚起し、二十世紀初頭には、学校教育制度の確立とともに近代学校教育システムが整い始める。1905年の科举廃止は折からの日本留学ブームを更に盛り上げ、1909年には全国各省において、後に「大学」となる新式学堂の総数も52,348校を数えるまでになった¹⁾。1911年辛亥革命、翌年中華民国誕生という時代の激流の中、1909年に始まったアメリカへの公費派遣留学生は1925年までに千名を越え、同時にヨーロッパへの留学生も増加しつつあった。中国人学生の日本留学も、畢竟するに日本を通して欧米を学ぶことを目的としたものであり、1927年に成立した南京国民政府は派遣留学教育をより強化していく。その結果、1935年には中国から外国へ留学した学生は1033名にも及んだ。後述するが、銭鍾書もこの1033名中の一人である。

このような中国近代史は、結果論として当時の中国が欧米の科学や知識を重視していたことを物語っていよう。この頃の新旧の知識人社会の様子を、佐藤慎一は次のようにまとめる。

清朝末期に始まった新式学校の建設事業もまた、民国期に受け継がれた。外国の教育援助もあって、全国の主要都市に大学等の高等教育機関がほぼ漏れなく整備され、外国留学からの帰国者が教壇に立ち、最新の西洋学術を教授するということが、ごく普通のこととして行なわれるようになる。

西洋学術伝達のための、知の回路が出来上がったのである。そして、高等教育機関で学び、かつ教育や出版などの文化事業に携わる者が増えたことを背景に、インテリゲンツィアの訳語として「智識階級」という言葉が作られ、用いられるようになる。(後略)

士大夫と「智識階級」の断絶を明白にした新文化運動は、「智識階級」が、新たな知識人としての自らの立場を、社会に向かって宣言する場でもあった。(中略)いま「智識階級」は、古典詩文の表現形式を批判して白話文をそれに対置し、儒教のイデオロギー的側面を批判して、「民主」と「科学」をそれに対置した。彼らは、単に士大夫を批判したのみならず、自らが士大夫に代替し得る社会層であることを明らかにしたのである。¹²

このように中国は半世紀にも至らぬ短期間のうちに、文化社会における激しい地殻変動を迎えたのであるが、新旧の価値観は片方が力を失い、もう片方が勃興隆盛したからと言って、すぐに前者の姿が歴史上から消えるという訳ではない。当然のことながら、しばらくは二つの価値観が同時に存在していた。

『困城』の主人公方鴻漸の父親方遯翁を見てみよう。前述の通り、方遯翁は清朝の挙人であった。挙人とは科挙の郷試合格者を言う。科挙受験においては「進士」及第をもって最高とするが、挙人は進士の受験有資格者であり、進士ほどではないにしても十分に名士扱いされていた。作者錢鍾書は江蘇省無錫の出身で、多くの文人を輩出した名家に生まれ育っている。方遯翁は、錢鍾書の親戚中に何人もいた科挙及第者が融合的にモデルとなっているかもしれない¹³。

官吏登用制度に過ぎなかったはずの科挙が、何故社会的に重視され、科挙の及第者が名士となったかについては、次のような背景がある。

旧体制の中国において、支配者と被支配者を分かつ指標は文化能力と道德能力の有無であり、支配の本質は、有徳者による民の教化であると観念されていた。皇帝を補翼して民の教化に当たる官僚は、それにふさわしい文化能力と道德能力を持たなくてはならない。科挙が定型的な詩文作成の能力を問うのは、受験者の文化能力の有無を検証するためであり、儒教経書の知識を問うのは、受験者の道德能力の有無を検証するためであった。科挙合格者は、傑出した文化担当資格と道德資格を有することを社会的に認

知された、誇り高い人々であり、そのような人々が官職を与えられ、一定の任期をもって全国の隅々にまで派遣されてその地域の行政と司法を担当し、その地位は決して世襲されないというのが、ヴォルテールすら感嘆した中国の官僚政治システムであった。¹⁴

つまり清代までの中国社会において、文化的に高い水準にあるということは、とりもなおさず道德面での高さをも意味していたのである。科举制度が千三百年にも亘って中国の王朝体制を支えてきた所以である。無論、制度的に様々な矛盾も内包し、それが限界を迎えたからこそ科举は廃止されたのであるが、「進士」や「举人」というだけで名士扱いされることが何ら不思議ではない土壌があった。こうした状況の下、士大夫層であった方遯翁は江南の地元においては大名士であり、商業で成功した人がわざわざお近付きの挨拶に来るほどである。方鴻漸には婚礼前に亡くなった婚約者がいたが、その父親というのも方遯翁を訪問し知遇を得た、ある銀行の頭取周某であった。

方遯翁は時代の流れを敏感に感じ取ったのであろう、息子方鴻漸には北平の大学へ通わせる一方、方鴻漸が高校生の際に婚約を取り決めたり、息子に古文による手紙を送るなどして、彼の中でも新旧の価値観は渾然としている。民国期、結婚は当人達の意味は無関係に、親が家の格を考えて取り決めるのが常識であったし、科举受験生であつたら誰でも古文をものすることが出来たのである。

彼の価値観の混乱渾然は、方鴻漸の結婚の際にも表れる。方鴻漸が孫柔嘉と婚約した旨を実家に伝え、母親は息子が両親の承諾も得ずに婚約したことを軽率だと責めたが、方遯翁は「わしらは親としての責任は果たしただろう、あいつに周家の娘を嫁として用意してやったんだから。今回はあいつが自分で決めたんだ（中略）。お前もあいつらを構ってやる必要などなかろう？」（九章）と言う。当時、既に「婚約は男女当事者自ら取り決めるべきである」¹⁵との婚姻法が制定されていたが、現実には支配的であったのは、方鴻漸の母親の不満に象徴されるような伝統的な規範意識であった。この伝統的規範意識が引き起こした不幸な婚姻については、魯迅や郭沫若の例を挙げるまでもないだろう。この点において、方遯翁の旧式結婚に拘らない態度は開明的であると言える。しかし、その一方で彼は息子の妻となった孫柔嘉に次のように言う。

「あなたに忠告しておきたいんだが。仕事をするのは勿論構わない。しかし、夫婦が二人とも外で仕事をするのは、“家に主なければ、箒が逆さまに立つ”と言いましてな、しっちゃかめっちゃかになって、家庭は有名無実化してしまう。わしも頑固者という訳じゃないんだが、やはり女の責任は家事だと思う。（中略）あなた方は亭主が満足するように仕えなくちゃいけない。」（九章）

これに対し、孫柔嘉は嫌々ながら頷くのだが、ここでは 1930 年代に中国言論界で展開された「女は家に帰れ」論争¹⁶が想起される。当時、五四運動以来の新しい女性観や自由恋愛や核家族といった近代家族制を前提としながらも、家事を主管するのは妻であるべきという新良妻賢母論や、夫にも賢夫良父たることを要求すると同時に、やはり妻にも「良き妻・良き母」たることを求める論が唱えられていたのである。方遯翁の孫柔嘉への「忠告」は、まさにこの新良妻賢母論であり、しかも「仕事をするのは勿論構わない」という鷹揚な姿勢を隠れ蓑にした根深い儒教的封建意識を照射させるものとなっている。

以上見てきたように、方遯翁は決して旧式の社会制度に恋々とするだけの人間ではなく、息子の教育や結婚に対しても新しい風潮を認める姿勢を示している。息子を全面的に自分の支配下に置くことはせず、自主性をとりあえずは重んじている。伝統的な中国社会において、士大夫層が士大夫層であるがゆえにエリートを自任し、その存在価値に疑いを容れなかった歴史に立ち返れば、方遯翁の態度は極めて開明的である。ただ、彼の中で価値観は、反転するほどには変革されていない。しかし、方遯翁にしてみれば、新しい社会は旧社会よりも良いものであるという民国期の思想的背景の中で、西欧の学術・思想を身に付け、自由恋愛によって結ばれたはずの息子が、何故結果として自分達より良い生活を送る訳でもなければ、夫婦が睦まじくもないという状態になったのかは、大いに謎であるに違いない。

3. 西欧留学組の彷徨

本節では息子の方鴻漸を追ってみよう。方鴻漸は北平の大学を四年で卒業し

たが、専攻はまず土木工学に躰き、社会学から哲学へと転科し、最終的には中国文学科を出た。彼は大学在学中、初めて体験する男女共学に目が眩んでいたのである。

方鴻漸の大学在学期間は、小説冒頭の 1937 年から遡って計算すると大体 1931 年から 1934 年になる。参考までに現実の 1931 年当時の統計を見ると、全国の高等教育機関数は 103 校、在籍学生総数は 44,167 人である。同じ年の小学校在籍児童数が 1,172,596 人、中学校の在籍生徒数が 401,772 人であることに鑑み、更に当時は義務教育法もなかったことをも考慮すれば、当時の大学生が限りなく少数派であり、選ばれたエリート層であることは間違いない¹⁷。方鴻漸の大学在学は、1929 年に清華大学外国語文学系に入学し、33 年に卒業した作者錢鍾書の経歴と重なる点がある。ところが、方鴻漸の学生生活は、「清華の龍」であるとか、外国語文学系の「三傑」、文学院の「四才子」などと称されたほど、その際立った優秀さが有名であった作者自身に比すまでもなく¹⁸、「エリート」とは到底言えないものであり、四年で卒業出来たことが寧ろ不思議なほどである。数度に及ぶ転科も、目的や希望があつてのことではなく、大学での勉強において、ただ無為に日々を過ごしていた結果に過ぎない。『困城』の主人公方鴻漸は、江南の士大夫階層の名家出身であり、科挙受験の苦しみは逃れ、新式の大学に通う機会を得られた幸運児であるが、実際はこのようなアンチ・ヒーローなのである。

大学卒業後も方鴻漸の放蕩息子ぶりは続く。亡き婚約者の父親周頭取の援助でヨーロッパ留学をしたのだが、生活は次のようなものであった。

方鴻漸はヨーロッパに着いたが、敦煌の經書を筆写しようともせず、また『永樂大典』を拝みにも行かず、更には太平天国の文獻を探そうともしない。蒙古語、チベット語、サンスクリット語の勉強など、する気もなかった。四年間のうちに大学を、ロンドン・パリ・ベルリンと三つも変え、適当に幾つか講義を聴くばかり、興味関心は広がったものの、収穫は皆無で、生活はひどくだらけたものだった。（一章）

大学生ですらエリートであった当時、ヨーロッパ留学生は望んでも叶えられない者がいたであろうほど恵まれた境遇であり、エリート中のエリートであっ

た。実際、外国留学組は帰国後、民国中国にあって様々な分野で活躍をしている。例えば、文学革命を支えた面々は、胡適がアメリカ留学、陳独秀、魯迅・周作人兄弟が日本留学をそれぞれしているのは周知の通りであるし、また南京国民政府は十三回内閣改造を行っているが、その総成員数は 109 人、うち外国留学組は 62 人と過半数を占めていたのである。

『圉城』の著者である錢鍾書自身、1935 年第三回中英庚款公費留学（1900 年〔光緒 26 年庚子の年〕の義和団事件の賠償金を基にした公費留学制度：杉村注）の試験を受け、二年間イギリスのケンブリッジ大学に留学している。35 年の庚款公費留学試験には 290 人が応募、実際に受験をしたのは 262 人で、合格者は 25 人であった。そのうち、錢鍾書は平均点が 87.95 点でトップ合格である。錢鍾書の清華大学の同級生には、錢鍾書が受験すると知って、受験するのを諦めた者もいる。先に述べたように、錢鍾書は清華在学時に有名な秀才だったからである。この同級生とは、清華の外国語文学系の「三傑」の一人、後に劇作家として活躍する曹禺であった¹⁹。錢鍾書は 37 年秋には渡仏し、パリ大学に籍を置くが、同年 7 月 7 日の盧溝橋事件に端を発する日中戦争の激化に伴い、一年間で帰国を余儀なくされる。尤も、この時錢鍾書は母校清華大学外国語文学系から招聘されており、帰国後は教授の椅子が待っていたのであった。

『圉城』の方鴻漸には、このような輝かしい経歴の持ち主である作者錢鍾書の姿は全く投影されていないように見える。

一方の方鴻漸は、だらけた生活を送ったばかりか、インチキをして帰国する。父親と、亡くなった婚約者の父親で留学の出資者である周頭取の双方から、学位取得の成否を問われ、慌ててアメリカにいたアイルランド人を騙して、十ドルでありもしない「コロリントン大学」の学位記を入手。それに加えて、写真屋でドイツの大学の博士の礼服を着て、写真を撮り、父親と周頭取に送ったのである。『圉城』を通読すると、方鴻漸はとりたてて悪人という訳でもなく、決して頭も悪くない人間であることがわかるのだが、こうした一連の所業は、少なくとも彼のいい加減でちゃらんぼらん性格を表していると言えるだろう。錢鍾書は、近代中国を支えるはずのエリート層の青年を主人公に据えながら、その卑小な実態を諷刺的に描き出したのである。方鴻漸は享受できる権利や利

益は享受するが、得たものを社会に還元しようという意識の欠落した、言わば社会的エリートたる自覚の完全に欠落した享乐的な「近代」青年の表徴であった。

さて、方鴻漸の帰国の船には、同じく留学帰りの二人の女性が同乗していた。方鴻漸の大学の同級生である蘇文紈と鮑小姐である。蘇文紈はリヨンの大学でフランス文学を修め、博士号を取得した才媛。鮑小姐はロンドンで二年間医学を修めた、ポルトガル人の血を引く美人。方鴻漸は船の上でこの二人から秋波を送られ、あっさり鮑小姐の誘惑の手に落ちた。しかし、鮑小姐はあくまで小さな火遊びのつもりだったらしく、下船と同時に方鴻漸は彼女から一顧だにされなくなった。こうした恋とも遊びともつかない男女のやりとりは、ある意味、時代や国に関係なく目睹される普遍的事柄であろう。しかし、『围城』が発表された抗戦終結直後の中国社会においては、「ありとあらゆる美の描かれた一枚の春画、砂糖衣に包まれた毒を含んだ一服の精力剤」²⁰と称されたり、「世間を軽んじ、言行不遜」、「作者は全ての生存競争の動物性のみを見、全ての生存競争の社会階級闘争的意義を疎かにしている」²¹などと評される基となっている。

又、方鴻漸に振られる蘇文紈は、ケンブリッジ大学で文学を専攻した詩人の曹元朗と婚約するが、後に化粧品などの闇物資のブローカーになり、曹元朗は重慶で物資や食糧を管理する政府機関に勤める。蘇文紈のそうした状況に対し、方鴻漸は親友趙辛楣は次のように言葉を交わす。

方鴻漸は驚きのあまり叫び出すところだった。（中略）「おかしい話だ！僕は全くそんなこと思いもよらなかったよ！彼女が商売をしなきゃならないのか？僕は李梅亭みたいな奴だけが闇物資を扱うんだとばかり思ってた！彼女は女流詩人じゃないか！彼女、口語詩はまだ作ってるのか？」辛楣は笑って言った。「知らないよ。彼女は大した経営上手だぜ！彼女はさっきうちの母に早く外貨を買うように勧めてた。思うに、女ってのは皆、立派な策士だね。」（八章）

方鴻漸と趙辛楣のこの会話は、フランス文学で博士号を取得したほどの才媛が、生活のために闇物資のブローカーをしているという事実へのごく純粋な驚

愕とのみ受け取るべきではない。彼らの考えの後方には商売をすることへの蔑視がある。ここでは、広く中国における伝統的な商業蔑視を指摘できるだろう。否、商業に従事することへの蔑視と言うよりは、士農工商の「士」以外への蔑視と言うべきか。孟子は次のように言う。

或るものは心を勞し、或るものは力を勞すと曰うなり。心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるる者は人を^{やしな}食ひ、人を^{やしな}治むる者は人に食^{やしな}わらるは、天下の通義なり。²²

「知力をもって働く者は人の上に立って治め、肉体をもって働く者は人に治められる。これが天下にあまねく通用する道理である」とするこの孟子の論自体は、必ずしも肉体労働蔑視ではない。2.で述べたように、伝統的中国社会においては、知的労働に携わる士大夫層の道德面での高さが社会的に認知されていたゆえに、士大夫層は支配者たり得たのであり、単純に知的労働に携わることがイコール支配者層を意味していた訳ではない。実際、孟子は支配者としての心構えや責任を前面化させ、仁政王道を主唱した思想家でもある。しかし、孟子の論は結果として、知的労働者イコール支配者、肉体労働者イコール被支配者という鮮明な区分を示し、一般的指導原理として伝統的中国社会における人々の生活・思想のあり方に有形無形の影響を及ぼしてきた。こうした伝統的儒教倫理観があったからこそ、方鴻漸は蘇文紈が闇物資の仲買をすることに對し、時局柄やむを得ないという同情などではなく「全くそんなこと思いもよらなかった！」という反応を見せたのである。だらけた学生時代・留学生活を送り、偽の学位を取って帰国をした方鴻漸ですら、こうした伝統的儒教倫理から自由ではなかったのである。

フランス文学の女博士は生活の糧を得るために闇物資を扱い、外国で適当に遊び暮らしていただけの方鴻漸が却って伝統的な価値観の束縛を受けている。錢鍾書が描いた彼ら新式知識人については、些か極論めくが、こう指摘できるのではないだろうか。中国の新式知識人が体得し、それをもって近代社会の発展に寄与しようと努めた西欧経由の学識や技術は、所詮薄皮に過ぎず、彼らの中身は変えようにも変えられぬ「伝統的儒教倫理」の塊であった、と。『围城』は「西欧近代」を体現している新式知識人達が、図らずも「伝統中国」を背

負っている様をも描き出した。彼ら新式知識人の姿は、「近代中国」を標榜しつつあった当時の中国社会の明確な歪みであると言えるだろう。

科挙やそれに基づく官僚制度に寄生する文人・知識人の墮落腐敗は、前述の『儒林外史』以外にも、魯迅「孔乙己」（1919年）などによって既に諷刺されている。魯迅「孔乙己」の35年後、新式の知識人達が、その当の新式知識人たる錢鍾書によってこのように徹底的に諷刺されたことは、翻ってみれば、35年という中国史においてはほんの一瞬とも言い得る時間の中で、中国の経てきた道程の複雑さや歪^{いびつ}さ、脆弱さをも物語っていると受け取れるのではないだろうか。西欧から学んだ新式の学術は、元来は19世紀後半以来の救国・富国強兵に目的の主眼を置いたものであった訳だが、当然中国の「近代」化のあり方にも大きく関わることになる。錢鍾書の筆は、旧式の知識人を描くことで旧制度・旧社会を批判・諷刺するにとどまらず、新式の知識人を描くことで中国の「近代」化の歪^{ひず}みをも徹底的に批判・諷刺したのである。

4. 結び ―中国「近代」がぶつかった壁

「近代文学」について伊藤虎丸は次のように述べる。

そもそも「近代文学」の主要な任務は、ネガティブには、古い封建的な人間観とそれに根を置く様々な社会的規制・規範に対する批判・抗議にあったと同時に、ポジティブには、新しい近代の人間観を新しい人間像として、これに血肉を具えた形象を与え、新しい英雄人物・典型人物を造り出すことにあったはずである。（後略）

そもそも、古い価値の否定、旧来の人間観への糾弾は、すでに何らかの形で、新しい価値の到来への胸の慄えるような予感、新しい人間観への目覚めを、前提としてはいないだろうか。（傍点著者）²³

伊藤はここで、魯迅が「中国近代文学の父」と呼ばれることに関して、改めて「近代文学」の定義を確認している。伊藤の論は更に進むと、魯迅『阿Q正伝』における否定的形象としての阿Qが、否定的人物を土台として自己変革を促し、その先に新しい人物像の創出があり得るという形で、実は単なる否定的

形象ではなく、近代的な意味での「新しい英雄人物・典型人物」を示しているのだという論につながる。

伊藤の鲁迅論については、本論と直接の関係がないためにここでの詳解は避けるが、「近代文学」の定義はとりあえず特殊な見解を挟むことのない、ある意味教科書的で中立的なものであると言って良いだろう。今、仮にこの定義に錢鍾書『圉城』を照らし合わせてみると、旧式の知識人否定に関しては「旧い価値の否定、旧来の人間観への糾弾」というわかりやすい意味を有しているために理解が容易である。それは重い伝統中国を否定し、新生中国を希求するという、近代化の道を歩みつつあった中国ならではの心性の表れでもあるからだ。しかし、新式の知識人の否定に関しては、3.で既に見たように「近代」中国の歪みへの痛烈な批判・諷刺である。当時、稀有にして新しい存在であった大学生・欧米留学からの帰国組が、「新しい価値の到来への胸の慄えるような予感、新しい人間観への目覚め」などではなく、「近代」中国の歪みを体現していたというのは極めて逆説的ではないだろうか。

錢鍾書は『圉城』の「序」冒頭において、次のように述べている。

この本の中で、私は現代中国のある部分の社会、ある種類の人間を書いたかった。そうした種類の人間を書くのに、私は彼らが人類であるということ、単なる人類、無毛両足動物の基本的性質を備えている人類であるということのを忘れなかった。登場人物は無論虚構であるが、しかし考証癖のある人も当然、隠されていることを探る機会を逃がすまい、付会する権利を放棄しまいと思うだろう。

錢鍾書が『圉城』で描き出したものは、「現代中国のある部分の社会、ある種類の人間」であったのかもしれないが、それらはおそらく著者の意図をはるかに超えて、現代に至る中国の歴史的社会的な一段面の様相を鮮やかに示した。

中国は日本と同様、「^{ウェスタン・インパクト}西欧の衝撃」によって已む無く近代化を迫られた訳であるが、清末の「^{ウェスタン・インパクト}西欧の衝撃」が中国にとって「衝撃」であったのは、西欧列強が中国よりも優れた武力を擁していたばかりでなく、文化的にも優れていたからである。そもそも他民族の侵略を受けるということそれ自体は、中国史上別に珍しいことではない。しかし、「^{ウェスタン・インパクト}西欧の衝撃」が従来の侵略と全く異な

るのは、西欧が中国に対し、中国よりも強大な世界秩序があることを示したからであった。近代化の成否が新しい学術や科学技術の導入、社会制度の改変、産業化の進展などではなく、人々の精神面・意識面での大変革によることは、ここで改めて確認するまでもないが、詰まる所、中国の「近代化」の過程は、中国こそが世界の中心であるという矜持が、単なる盲信に過ぎなかったことを思い知らされる過程に他ならなかったはずである。にもかかわらず、『囲城』から見えるのは、中国の長い歴史と文化が中国人に植え付けた「中国こそが世界の冠たる存在である」という過剰な自信と肥大した自己意識が、「西欧の衝撃」以降も真には変革されなかったという重苦しい事実であるように思われる。それは当時の中国人自身、明確には意識し得ていないことかもしれない。錢鍾書『囲城』は方鴻漸を通して「人生の願望は大抵このようなもの」という境地、言わば普遍的な人間の境涯を描いているのだが、人生一般だけでなく当時の知識人のあり方、延いては中国という国のあり方、「近代」のあり方についても「囲城」の境地を描き出したのである。錢鍾書がどこまで意図して描いたかは判然としないが、『囲城』の作品世界は畢竟、中国および中国人を取り巻く社会や文化といった一つの世界における「城の外の人」は攻め入りたいし、城の中の人」は逃げ出したい」という「囲城」状態であった。筆者が1.において「実は別の大きな問題意識をも孕んでいる」と述べたのは、まさにこの点においてである。「囲城」は人生の哲理とともに、中国「近代」の直面していた壁をも表象しているのである。

更に加えて言えば、錢鍾書の『囲城』が発表された当時、中国社会は抗日戦争に勝利した直後とは言え、抗日のために手を組んでいた国民党と共産党が早くも決裂し、抗戦を交えんとしていた、社会的に不安定な時期にあった。実際、錢鍾書が雑誌『文芸復興』において『囲城』の連載を始めた五ヵ月後の1946年7月には、国共両党は全面的な内戦に突入している。人民において抗戦勝利の喜びが、既に霧消していたであろうことは想像に難くない。結果として共産党が国民党に勝利し、1949年10月1日には中華人民共和国が誕生するという運びになったものの、国共内戦は中国の人々にとっては同国民同士が刃を交えるという、つらくも情けない一幕であっただろう。外国の侵略から逃れるために必死に戦い、漸く勝利を得たと思いきや、更なる敵は自国民であった。これ

もまさに当時の中国が陥っていた「囲城」の境涯である。

『囲城』に描かれた「囲城」の境涯は、新旧知識人ばかりではない。主人公方鴻漸を始めとする登場人物達が繰り広げた恋愛と結婚の様相にも、「囲城」は見出せるのだが、これについては稿を改めて論じることしたい。

¹ 錢鍾書、字は默存、号は槐聚。1910.11.21-1998.12.19。作家・学者。江蘇省無錫出身。著書に長篇小説『囲城』、古籍研究論著『管錐編』などがある。拙論「一九四〇年代における錢鍾書——文人・知識人諷刺のゆくえ」（『言語文化論叢』第8号 金沢大学外国語教育研究センター2004年3月）、「散文『悪魔の夜の錢鍾書先生訪問』試論——作家の自己対話と西南聯合大学における錢鍾書」（『言語文化論叢』第12号 金沢大学外国語教育研究センター2008年3月）に詳しい。

² 長篇小説。1946年から一年間『文芸復興』に連載。1947年6月、上海晨光出版公司から単行本化され刊行。詳しくは、拙稿「錢鍾書『囲城』小論——夢の終焉」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第20号2001年4月）、注1前掲拙稿2004を参照されたい。邦訳には荒井健・中島長文・中島みどり訳『結婚狂詩曲（囲城）』上下（岩波文庫1988年2月）がある。

³ 孫雄飛「錢鍾書、楊絳談『囲城』改編」（解璽璋主編『囲城内外——從小説到電視劇』世界知識出版社1991年8月）

⁴ 錢鍾書著『囲城』人民文学出版社1980年10月。以後、『囲城』からの引用は全てこのテキストに依拠し、拙訳による。

⁵ モンテーニュ著、原二郎訳『エッセ（五）』岩波文庫昭和42年9月。第三卷第五章「ウェルギリウスの詩句について」

⁶ 趙瑞蕓著『離乱弦歌憶旧游——從西南聯大到金色的晚秋』文匯出版社2000年5月

⁷ 李健吾「重読『囲城』」。田蕙蘭他選編『錢鍾書楊絳研究資料集』（華中師範大学出版社1990年11月）所収。初出は『文芸報』1981年第3期。

⁸ 王偉「略談『囲城』の主題意蘊」（『芸譚』1986年第4期）

⁹ 無咎「読『囲城』」（『小説』月刊第一卷第一期 1948年7月）に「恋愛は正に新儒林外史」の人物達の新課程である。」とある。その後、楊義著『中国現代小説史』第三卷人民文学出版社1986年9月で『囲城』が「新儒林外史」と紹介されるなどする。

¹⁰ 中国語における「近代」は、中国史学界が設けた歴史区分の1840年のアヘン戦争から1919年の五四運動までの一時期を指し、五四時期以降を「現代」と言うが、

本稿では日本語の意味に則って「近代」を用いることとする。つまり本稿で「近代化」と言う場合は、封建社会から科学的・合理的・民主的な社会への変換を指す。

¹¹ 李華興主編『民国教育史』上海教育出版社 1997 年 8 月。民国期の教育情况やシステムに関する記述は、本書を参考とした。

¹² 佐藤慎一著『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会 1996 年 12 月

¹³ 楊絳は「記錢鍾書与『围城』」（『楊絳文集』第二卷、散文卷・上 人民文学出版社 2004 年 5 月）で「読者は、彼（方遯翁）は方鴻漸の父親なのだから、当然錢鍾書の父親（がモデル）であると思われるだろうが、方遯翁と錢鍾書の父親は少ししか似ていない。」と述べている。錢鍾書の父錢基博（1887-1957）は、科学には及第していないが、清華大学国文系教授、浙江大学国文系教授、華中師範大学中文系教授などを歴任、古典学者として著名。また、錢鍾書の一族では、例えば錢鍾書の祖父錢福炯は生員であり、祖父の長兄錢福煒、次兄錢熙元は挙人、錢鍾書の伯父錢基成は生員であった。更に、錢鍾書の母方の祖父王績は生員、祖父の兄王緯は進士、伯父王蘊章は挙人。これらは、孔慶茂著『丹桂堂前——錢鍾書家族文化史』長江文芸出版社 2000 年 9 月、劉桂秋著『無錫時期的錢基博与錢鍾書』上海社会科学院出版社 2004 年 3 月を参考にした。

¹⁴ 注 12 前掲書。

¹⁵ 1930 年 12 月 26 日公布、31 年 5 月 5 日施行中華国民民法第四編「親屬」第二章「婚姻」第一節「婚約」。詳しくは、中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年——史料にみる歩み』青木書店 2004 年 3 月、顧鑑塘・顧鳴塘著『中国歴代婚姻与家庭』商務印書館 1996 年 12 月、白水紀子著『中国女性の 20 世紀——近現代家父長制研究』明石書店 2001 年 4 月などを参照されたい。

¹⁶ 詳しくは陳姪媛著『東アジアの良妻賢母論——創られた伝統』勁草書房 2006 年 11 月と江上幸子「中国の賢妻良母思想と“モダンガール”——一九三〇年代中期の“女は家に帰れ”論争から」（早川紀代他編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店 2007 年 7 月）を参照されたい。

¹⁷ 注 11 前掲書。民国期、初等教育機関は「小学校」と呼ばれる初級小学校と高級小学校、中等教育機関は「中学校」と呼ばれる初級中学校と高級中学校の他、師範学校や職業学校があった。また、高等教育機関には大学以外に、中等教育課程修了者を対象とした専科學校もある。

¹⁸ 注 13 楊絳前掲文章には、次のようにある。「多くの読者は、方鴻漸こそ作者本人であると思われるのだろう。フランス 19 世紀の小説『ボヴァリー夫人』の

作者フローベールは、かつて“ボヴァリー夫人は私だ”と言ったそうである。それならば、錢鍾書も同じように“方鴻漸は私だ”と言っても良さそうなものだが、他の多くの登場人物達も錢鍾書であると言え、方鴻漸一人にとどまらないことになる。方鴻漸と錢鍾書はどちらも無錫人であるというだけで、彼ら二人の経歴は全く異なるものだ。」

¹⁹ 錢鍾書の留学試験受験及びイギリス留学に関しては、孔慶茂著『錢鍾書伝』江蘇文芸出版社 1992 年 4 月、湯晏著『一大才子錢鍾書』上海人民出版社 2005 年 5 月を参考にした。

²⁰ 張羽「從『困城』看錢鍾書」。湯溢澤編『錢鍾書「困城」批判』（湖南大学出版社 2000 年 12 月）所収。初出は『同代人』第一卷第一期 1948 年 4 月。

²¹ 注 9 無咎前掲文章。

²² 『孟子』上巻、小林勝人訳注、岩波文庫昭和 43 年 2 月。また文の解釈には、貝塚茂樹編『孔子・孟子』中央公論社昭和 53 年 6 月も参考にした。

²³ 伊藤虎丸著『近代の精神と中国現代文学』汲古書院 2007 年 10 月

【附記】

本稿は平成 19 年度科学研究費補助金の交付を受けた若手研究（B）「1940 年代文学に見る“中国近代”の隘路」（課題番号 19720077）による研究成果の一部である。